平成19年7月1日

郷土あれこれ

第18号

発行　あきる野市教育委員会　東京都あきる野市二宮350　電話 042-558-1111　FAX 042-558-1560

あきる野地名考　その2

元立川市・羽村市文化財保護審議会委員　保　坂　芳　春

あきる野市は平成７年９月に、秋川市と五日市町が合併して誕生した名前です。あきる野市とは古い伝統を残した、新しい感覚の本当によい名前だと思います。この名前がついた時点で、ひらがなと漢字を入れた市名は、日本で一つだったと記憶しています。

その「あきる」という地名と、あきる野市に残る、江戸時代にあった30程の村名について考えてみます。

―「あきる」とは―

五日市に古社阿伎留（あきる）神社があります。この社は10世紀にできた『延喜式』巻九に、多摩郡八座の筆頭として載っています。それより約30年前に出された『日本三代実録』（六国史の第六）には、「元慶八年（884）七月十五日、武蔵国正五位下　勲六等畔切神に従四位下を授く」と記載されています。阿伎留は畔切（あきり）なのです。言葉は通音（つういん）といい、隣に移っていきやすく、同じ行ですと、「り」が「る」になることはあります。

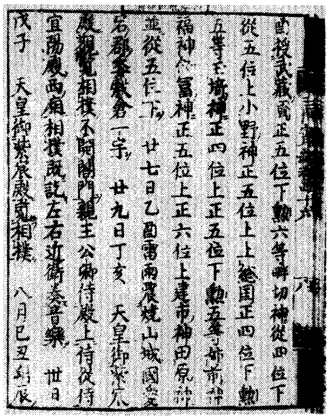
同じ10世紀頃、東山道（とうさんどう）の一国上野国（こうずけのくに）（群馬県）に畔切（安伎利）郷がありました。

旧阿伎留郷の阿伎留神社

「切り」は開くという意味があります。田切り、畔切り、切り畑等の切りは開墾の事です。新しく切り開いた土地は新切りといい、畔を切り開く事です。『五日市町史』では、畔をこわす方を取り上げましたが、私の考えは畔を切り開く方で、畔切神（あきる）は土地を切り開く神様だったと思います。

畔を切り開くというと、阿伎留神社の近くには、古い田がない、と言われますが、中国の言葉で「白田」を畑と言っています。日本では水田と畑を一緒にして、畠という字をつくりました。ですから畠には音（おん）がないのです。田がなくても大きな意味で、田畑は畠と考えればいい訳です。畔切は畑を開拓するという意味だと思います。

延喜式神名帳の多摩郡八座の筆頭に載る
阿伎留神社（西多摩神社誌より転載）


武蔵国正五位下勲六等畔切神従四位下
従五位上小野神正五位上 上総国正四位下勲
五等玉埼神正四位上正五位下勲五等[illegible]神
[illegible]神[illegible]神正五位上正六位上建市神田原神
並従五位下 廿七日乙酉雷雨震焼山城国[illegible]
[illegible]一字 廿九日丁亥 天皇御紫宸
殿観相撲 不開閣門 親王公卿侍殿上 侍従侍
宜陽殿西廂 相撲[illegible]訖 左右近衛奏音楽 卅日
戊子 天皇御紫宸殿覧相撲 八月己丑朔 辰

三代実録に載る畔切神
（西多摩神社誌より転載）

ーあきる野にあった村々ー

小川

全国でも多い地名の一つです。『日本地理志科』（村岡良弼）という本に「多摩川、秋川ここに会う。よってこれを名づける」とあります。また『武蔵名勝図会』では「普門寺境内より流れ出づる藍染川が、これを小川といった」とあり、今は舞知川と言って、よく水があふれると言っていました。二宮神社の下で、灌漑しますから、そこが一面の田で、その周りに人が住んで水田や畑作をしていたのです。このような土地が小川と名付けられています。９世紀初頭の記録に出てくるという事は、奈良時代すでに多摩の郡に小川の里があったという事で、非常に古い地名です。

二宮

二ノ宮、二之宮とも書かれました。二宮は江戸時代に秋川筋きっての大村でした。二宮神社に由来する地名で、総社が成立し、六所の宮が生まれて、その二の宮となってからで『神道集』（1350年頃成立）に、二宮小川大明神と載っています。しかし、実際にはもっと古く、『吾妻鏡』によれば嘉貞４年（1238）２月、将軍頼経が上洛した折、御所の随兵192騎の中に、二宮左衛門太郎の他２人の二宮氏の名が見えるのが初見です。この時点で二宮氏は二宮の地名を氏にしたのであろう事から、更に古く名付けられた地名と言えます。

平沢

二宮の下で平らな沢、谷に近い沢です。平らとは、平らだけでなく急な崖や山のヒラも言い、崖の代表に琵琶湖の淵にある「平山」という所があります。「ヒラの高嶺に降る雪も」の平、崖の山は平山、平坂は傾斜した坂、両方でなく片方だけの平らは片平、平澤は平井川沿いの浅い「平らな谷地」を意味すると見てよいでしょう。

草花

草花というと、草花が咲き乱れている所、草の花（よもぎ）が多くは生えていた、などと言いますが、草とは開墾地を言います。切りかえ畑になるように、草を生やして枯らし、それを焼いて肥料にして土地を肥やし、次に豆や雑穀等を作る。ふりくさという地名がありますが、これはふりかえ畑を言い、切りかえ畑なのです。
土地を順ぐりに、作物を作りかえる。関東から東北に多い地名、草と言うのは開墾の土地で、後地が畑などにすぐ変っていく所をいいます。ハナというのは突端で、人間でも出っ張りを鼻といいます。鼻（ハナ）は花です。草花は開墾地のハナなのです。

原小宮

小宮は平井川の岸、原にある小宮という形です。近くにある原町田などもそうです。

瀬戸岡

セドとセトは違います。セトは山がせまっている谷合を言います。セドは裏です。せどの井戸などと言います。裏の方の岡なのです。問題は、どこから見て裏かということです。あきるっ原の方には何もありません。菅生の方から見て、せど岡なのです。

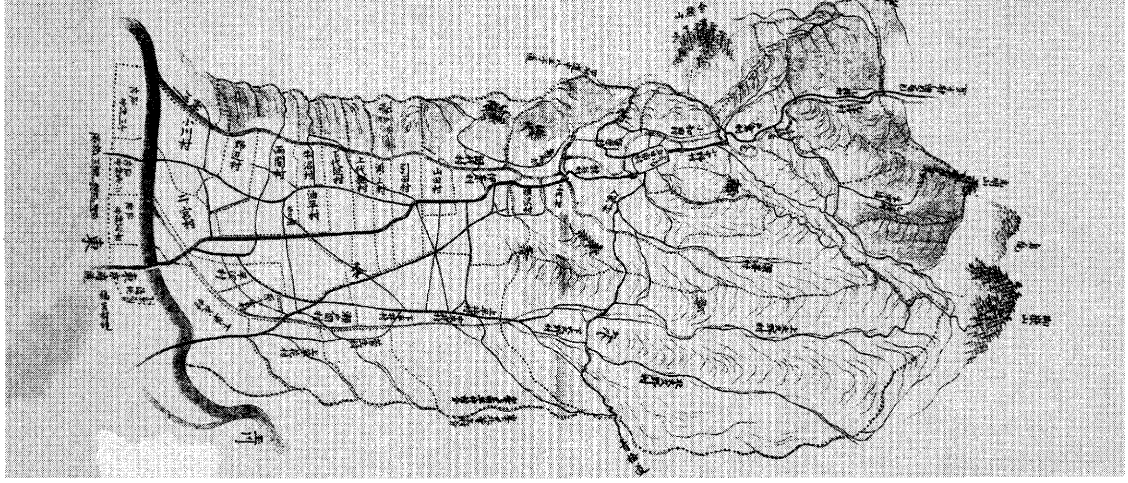
菅生

菅生は天文20年（1551）の小和田の広徳寺文書にも「須賀尾」として出てきます。今の菅生に間違いないと思います。戦国時代の終り頃に菅生と書かれるようになったようです。群馬県の桐生、福井県の武生等植物につけて、何々生、何々生などと表しています。
「菅とよむはすがと通ず。すがすがしき意」と『倭訓栞』にあって、スゲはスガともいうことがわかります。スゲフがスガフとなり、スガオと呼ばれている訳です。菅生を植物地名と考えて、蓑笠を作った「菅の生い茂っている所」と考えるのは『播磨風土記』以来の解釈ですが、当を得ているのではないでしょうか。

野辺

辺というのはあたりです。野のあたりを野辺といいます。野と原は少し違います。原は平らな畑になる所、野はやや起伏があり、山が混じっている所をいいます。
野を通って行くと山になる。高いのだけが山ではなく、平らでも木が生えている所は山といいます。「野辺の送り」など、野辺とは古い言葉で、万葉集に何か所も見られます。古くは「ノヘ」でした。

あきる野にあった村々の位置関係絵図



雨間

全国に一つしかない地名です。天間というのは大分県の別府に大字になってあります。天間（あまま）と雨間（あめま）は同一の地名とみてよいと思います。

雨は高い所をさし、間は場所をさします。茶の間とか居間とか。天はやや高い所を言います。要するに雨間とは、高い所をいうのです。雨間は高い所にあって、田を作るのに水に困るため、雨武主神社を祀り、雨乞を頼んだのです。雨武主神社は雨を生じる神社、武主はむすび、結んで三角にします。三角は神聖なのです。雨間は総合して考えると「灌漑の水を必要としたところ」というような意味になります。

牛沼

雨間のすぐ隣です。牛沼は動物地名などと言われますが、必ずしも、牛がつくから、馬がつくからではないのです。

牛込、馬込は囲う牧場のような所を言い、沼は自然に水がたまり、水草とかが生えるような所を言います。

牛のつく地名は沢山あります。近くでは牛浜や、牛久など。牛沼の場合、ウシ、ウス、ウソとつづき、ウスはうすい、色でいえば薄い色のもの、浅い色。アサとウシはつながっている、と言語学では言われています。

浅い色、薄い色、現代の感覚でいうと随分違っていますが、牛沼は浅い沼という所なのです。

油平

やや小高い台地を言います。秋留台地の南の端で、天正18年（1890）に中村但馬守が土着して村を開いたといわれています。江戸時代初期の『武蔵田園簿』という本に「油平村」として出てきます。この村は江戸時代のはじめにできた村です。アブラダという所は方々にあります。すぐ近くの日の出町にも油田という地名があります。昔の油はあかりなのです。あかりがないから陽の出に起きて、陽の入に寝ました。一般の庶民は炉の火を使ったり、ヒデ鉢といって、石の鉢があり、そこに松の根を細かく切ってのせ、火をつけてあかりをとりました。ヒデ鉢は多摩市や檜原村にも残っていました。また、荏胡麻の油で灯心を使ってともしました。荏胡麻は貴重な作物でした。品川区には荏原という所がありますが、そこは荏の原だったのです。

油平は油の平らです。誰が油を作ったかというと、二宮の舘にいた土豪などでしょう。一般の庶民には、とても手に届かないものでした。江戸時代の中ごろに急に広まったのが油菜です。関西から作り出されて、あっという間に全国に広まりました。柳田国男が「日本の生活が、油菜によって明るくなった」と言っています。菜種油を灯心で燃やして明るくなり、もう一つ、和紙が安く買えるようになって、障子が出来たため明るくなったのです。それまでの板戸では全く明るくありません。日本の生活が江戸時代後期になって一新し明治につながるのです。それからランプになり、ランプのほやの掃除は子供の仕事でした。

油平は『武蔵志』によれば「アブラタイラ」と呼んでいます。18世紀の末頃にはアブラタイラと呼んだこともあったようです。油をとる作物を栽培したところが油田と呼ばれます。そうした作物を作る畑のある平らが油平です。油平は、おそらく荏胡麻が栽培されていた所でしょう。

代継

代継というのは地名をやっているものにとって

難物なのです。余次、世継と書く所もあります。

四ツ木榾（よつぎほだ）というのは、今は習慣がなくなっていますが、昔は火を絶やさないのが家庭の主婦の一番大きな仕事だったと思うのです。火を守る事、火を大切にして一年の終りに、一年の火に感謝すると同時に、また来年も良き年であるようにというのが、この四ツ木榾なのです。

四ツ木榾というのは、家々の囲炉裏（いろり）の四隅（よすみ）から榾木（ほだぎ）をくべて、赤々と燃やす事をいいます。どんな木かというと樫の木などの堅い木だったのです。この四ツ木榾の木を出す所を代継(四ツ木)と呼んだのではないかと思います。

淵上（ふちがみ）

流れが深くゆるくなる所を瀞（とろ）、深くても、もう少し流れのある所を淵と言います。川の流れの上（じょう）流（りゅう）が上（かみ）、下流（かりゅう）が下（しも）で、上下（かみしも）のつく地名は沢山あります。江戸時代の本に「地蔵淵があって、その上を淵の上といった」と書いてあります。『武蔵志』には「フチノウエ」と書いてあります。古くは「フチノウエ」または「フチノエ」と呼んでいたのです。「フチガミ」では、上流にある引田の方になってしまい、意味があわないのです。しかし、「フチガミ」となったのも古く、明治18年内務省地理局が調査して書き上げた本に書かれています。呼び方はこれ以降の傾向です。

引田（ひきだ）

ひき蛙のヒキだとか、ひき蛙が沢山いるから蛙沢だとか、確かにそれもあります。

ヒキというのは、低いという言葉で、古い日本語にはあるのです。高（たか）・低（ひく）のヒクです。低いというのがヒキなのです。武蔵国比企郡という古い地名があります。

上野国（こうずけのくに）にも古い地名に疋太郡（ひきだ）というのがあります。

低い所の田は低田（ひきだ）、高い所は高田、中位（ちゅうくらい）の所を中田（なかだ）と言うのです。引田は古くは秋川沿いの低地に集落が開け、そこに低田を開いて生活していたものでしょう。

次第に村が大きくなるにつれて、低地から少しづつ台地の方へ開けてきました。引田は低い田です。

山田（やまだ）

山の中の田です。山の中には田んぼなど作れません。平たんの所に木が生えていて、そういう所に田を開くと山田になります。

網代（あじろ）

海岸に多い地名です。並木先生は秋川に網を張って魚を捕ったと言いますが、私は憶測ですがこう思います。鎌倉時代から網代氏という土豪がいて、案外、海の近くから当地へ移って来たと考えます。そして土着し、長く住み着いた土豪ではないかと思います。網代には、天正２年に書かれた『讃岐役所当番衆覚書』に出てくる貴志兵次という人がいました。秋川辺（べり）22村の中では、かなり頭（かしら）だったらしいのですが、資料を考証してこないと、はっきりわからないのです。

また、網代というのは、もともとは場所や、苗代、物の事を言います。田代や区画というのもそうです。

伊奈（いな）

並木先生は岩石の出る所と言うのですが、難しい地名です。砂に関連があると思います。全国にあって、川のそばで砂質の所が多いと言われています。信州天竜川沿いの伊奈平などと似ています。河岸段丘で、砂に関係があった所だと思います。

あきるっ原の出口でしたから、古くから市がひらけていて重要な所でした。今でも武蔵野の方に「伊奈道」というのがのこっています。

北条氏の文書の中に「平井と伊奈で交代で当番を務めろ」とありますが、古い村です。

三内（さんない）

この辺ではめずらしい地名で、青森県の三内丸山遺跡とか、秋田県など東北に多い地名です。

古い日本語を調べるのに、なくてはならない『日葡辞書（にっぽじしょ）』という本に「三内というのは山の中という」と出ています。17世紀近くにポルトガルの宣教師が、日本語をポルトガル語に訳した高価な本で、長崎で出版されました。

「山師（やまし）（山に入って鉱物などを見つける人)、木地師（きぢし）（お椀を作って歩く人）のような人達は移動します。

そういう人達がとどまった場所を三内と言うのではないか」、と柳田先生は言っています。私もそうではないかと思います。今でも「かじや」という所があきる野市菅生にありますが、これも渡り歩いて、鍋や釜、鎌（かま）、鉈（なた）などを直しながら歩いた人がいた場所と思われ、江戸時代中頃まで、こういう人達がいました。同じく立川にも「かじや」という地名があります。

山に来て仕事をする。そして、そこにまた、他の人が来て仕事をする。その仕事をする人達が、とどまった所が三内だと思います。

横沢（よこさわ）と舘谷（たてや）

横というのは建物とか施設などの横、苗字に前

田、横田、後田などあります。多摩の横山とか、どうして言うのでしょうか。大体太陽と同じ方向と交わります。

横沢は大悲願寺の横の沢、ということで間違いないでしょう。

刃など、守るものをタチと言います。敵の攻撃を防ぐ、身を守るものはタチであり、タテであります。ヤは谷（タニ）ほど深くはないが、やや水が溜まり、湿地帯みたいな低いところを谷(ヤ)と言い、この辺の特色で、奥まったりした所をヤツ・ヤトと言います。

全部タニではないが、平らだけれど湿地帯の所、水辺のタチが谷なのです。小宮氏系図には「立矢」と出てきます。

深沢

深い沢です。天文20年（1551）の広徳寺文書に出てきます。五日市憲法で有名な所です。

入野

入野は家から原、原から野、野から山に入って行く所を「イリノ」と言います。

高尾

山と山との突端、出っ張りの高くなっている所で、山ほど高くないが、原より上がっているような所を言います。天正２年（1574）の文書に出ています。

留原

天文20年（1551）の広徳寺文書に「戸津原」と出てきます。その後、天正２年(1574)の文書には「留原」になって出てきます。中世は澄む音だったのです。

江戸時代に近くなると濁音になってきて、留原(とどはら)となり、現在はトトハラと言っています。

留原はイタドリが生えている所だとか、並木先生が書かれていますが、トドの地名は方々にあります。近くでは八王子の柚木にあります。「とどのつまり」のトド、行き止まり、漢字で書けば極限のトドの原だと思います。

小和田

和田は川が曲がって流れていて、そこにある台地を言います。大きい場所を大和田、次に中和田、小和田とあります。近隣では八王子に大和田、浅川には和田、青梅には日向和田、日影和田等がありますが、皆同じような地形です。秋川の右岸で広徳時のある所です。

天文20年（1551）の広徳寺文書に「小和田」と書かれています。

五日市

五日市は、５のつく日に市が開かれたことにより付けられた地名です。市と町があります。市が開かれて、賑やかになると町と言います。「蟻まちがたった」などと言いますが、そういうまちは、市が発展して町となるのです。

小中野

中野は大野があって、中野、小野があります。全国で一番多いのが大野です。中野のそばには、野方という所があります。野の方なのです。

あきる野市の中野は「大野が五日市高校の高台を言い、そして中野があって、小野は玉林寺などがある小字の小能になった」と並木先生は言っていますが、確かにその通りだと思います。

中野は天文20年（1551）の広徳寺文書に出てきます。その後、寛文７年（1667）４月の「武蔵国多摩郡中野村御縄打水帳」にも、中野村として出てきます。

中野村に小（こ）が付いたのは元禄期（1688～1703）以降の事ですが、理由はわかりません。

戸倉

戸倉というと「古代の朝廷の穀物を収める倉、屯倉があったからだ」と解釈してしまいますが、地名は音で解釈していくことが大事です。倉は谷も崖もいいます。

戸倉は谷の入り口です。入り口は戸、トンボ、トンボ口とも言います。天正２年（1574）『讃岐役所当番衆覚書』に村名として出てくるのが初見ですが、それ以前、14世紀には「南一揆文書」に「小宮之内」と書かれています。そして、この古文書を所有し、住み続けた子孫が現在も生活しています。

乙津

津は港の事を言います。渡れる所を津、歩いたり馬で渡れる所です。大津は大きな港、乙津は小さな津を言います。

乙（おつ）とは、山があって、ニョロニョロとしなければ登れない所を言うと思います。乙はオツという説と、ウツ(動物が通る獣道)という説もあります。

秋川で渡って行ける所を乙津、流れが強くても、谷が深すぎても渡れないですし、以上の中にあてはまると思います。天正２年（1574）『讃岐役所当番衆覚書』に出てきます。

養沢

沢というのは植物と関連があります。桜沢、竹

沢、杉沢などがあります。動物でも、しか沢、たぬき沢などあります。

崖など切り立っていると守りやすいのです。昔はいつ襲われるかわかりませんから、山の上に集落があります。人が用意に近づけない所。平地だと、すぐに襲われてしまいます。檜原でも奥多摩でも山の上に家があります。中国地方でも、四国でも皆そうです。これは中世の名残りなのです。上の方に住んでいますと、敵が来たという時わかりやすいのです。川の崖淵程新しい家です。古い道ほど上にあります。

養は何か。並木先生は「日向」だと言っていますが、日向和田とかありますし、日向があれば日影があります。陽、要、用といろいろありますが、陽が一番使われていました。陽という字を地名に使うようになったのは、一般的に江戸時代に入ってからです。武陽銀行とか、甲陽軍鑑とか、武州の武陽、山城の城陽、常陸の常陽とか付けてきます。中国では、こういう陰陽で付ける地名が多いのですが、日本は大体日本語で付けるので少ないのです。

養沢だから木に関係してくると思うのです。ヤシャブシに似た木が沢山あった。でもヤシャブシ自身そんなに山にあった訳でもないらしいです。お歯黒や、黒八丈の染料に使う、黄色い花が咲く房状の黒い実が出来るヤシャブシの木でも沢山生えていたら解決もできるのですが、よくわかりません。

魚を（よう）とも言いました。魚（うお）というのは必ずしも動物の魚ではないのです。菜、なっぱ、酒のな、酒を飲む時の菜が魚（うお）なのです。だから酒のさかななのです。それを日本語では魚（うお）と言います。

養沢というのは、類するものが出てこないので、いろんな地名の本にも出てきませんから、よくわからない地名です。普済寺版刻記の貞治6年（1367）「陽澤衆廿八人」とあり、古くからあった村だと思います。

ー質問に答えてー

問　軍道（ぐんどう）という地名についてお願いします。

答　戦いがあって、その道だったから軍道等と言いますが、そうではないのです。ぐんどうの「ん」が使われるのは新しい時代なのです。日本には「ん」の字がなかったのです。だから50音（おん）には「ん」がありません。

軍道はくど、くんど、がくずれて「ぐんど」となったと思います。くどは崩壊地、崩れやすい所を言います。くの元の字は崩れるの「く」なのです。ずれるというのは放れることです。だから崩れる事です。

「ど」は場所、「せど」、物を納める「なんど」など場所を言います。高野山の入口には九戸山町（くどやまちょう）というところがあります。古い地図で見るとわかりやすいのですが、軍道の辺も等高線が込んでいて、地形的に崩れやすい場所です。「くんど」が濁音になって「ぐんど」になります。東海道を読む時は「とうかいどう」でも話す時は「とうかいど」となります。「ぐんど」が「ぐんどう」になったのです。

問　土地の事を聞くと、軍道紙（ぐんどうがみ）はあまりよい紙ではないのかと思いますが、地名から名付けたのでしょうか。

答　はいそうです。美濃紙の博物館へ行きましたら軍道紙を紹介していました。また、第一次世界大戦の後、ベルサイユ条約締結の時、日本からわざわざ越前和紙を取り寄せて使ったとも聞きました。和紙はしっかりした質の良い紙だという事です。軍道紙もお茶を作る時に、ほいろに張って火を通しても、障子紙に使っても丈夫で良い紙です。数百年前に書かれた古文書も変わらず保存されています。崩れやすい地形でも、昔の人は木を植えて崩れないような工夫をして住んだのです。土手に楮を植えて軍道紙を生産する。昔の人の生活の智恵です。あきる野市には「軍道紙」という素晴らしい特産物があるのです。

ー編集後記ー

「あきる野地名考」その1及びその2は、平成10年度から11年度にかけて5回にわたり開催した「地名考講座」の内容を、講師を担当された保坂芳春先生のご指導のもと、改めて原稿化させていただき、先生のご協力を得ながら五日市郷土館調査研究員清水菊子が編集したものであるため、文責は清水にあります。

ー「あきる野地名考　その1」の正誤表ー

	誤	正
P．2の右側上から3行目	火麻呂（な）	火麻呂（ほまろ）
P．3の左側上から8行目	土壙（ごう）	土壙（どこう）
P．3の右側上から13行目	望月（つき）	望月（もちづき）
P．3の右側上から19行目	麾下（さ）	麾下（きか）
P．5の左側上から23行目		旧多西村は原小宮も入ります。